あさほタイムズ　２月号

年も明け、あっという間に２月ですね。感染力の強い新型コロナの影響で、気の抜けない日々が続きますが、寒い中、半袖で元気に走り回る子どもたちに元気をもらっています。また、寒さも嫌なことばかりではなく、最近では、めっきり見なくなってしまった霜柱を、「こおり～」「きれい！」と発見を楽しみながら散歩道を楽しいでいます。

さて、今回のテーマは悩みが多く聞かれる、
「きょうだいを育てる」について『2020年12月号　育児雑誌　ちいさいなかま』より紹介したいと思います。

「きょうだいげんかの仲裁は？」「どっちを優先すればいいの？」「上の子に我慢させてしまってかわいそう」
「上の子の赤ちゃん返りや、やきもちはどうしたらいいの？」…などなどきょうだい育ての悩みは尽きませんよね。
まずは、「きょうだいができるときの子どもの心理的な発達」の面から、とらえてみましょう！

□「きょうだいができること」を、発達の目でみれば

家族に「赤ちゃん」という新しいメンバーが加わるときは、すでにいるメンバーであった、大人にとっても、子どもにとっても、大きな変化が生じるものです。「お父さん」になった、夫が「お母さん」になった、妻を赤ちゃんに取られたような気持になって、嫉妬するという話も耳にします。大人でそうなのですから、体は小さいけれども存在感は大きい「赤ちゃん」という生き物がやってきて、急に「お兄ちゃん、お姉ちゃん」になった子どもの困惑はどれほどのものでしょうか。

子どもにとって、きょうだいができる時期は家庭によって違いますが、早ければ１歳時期です。１歳時期では、次は○○しよう…と「つもり」を持って、行動し始め、周りの大人に支えられながら少しずつ生活の主人公になっていきます。２～3歳時期にかけては、素敵な自分を大人に認めてもらいたい気持ちがさらに高まるとともに、強い自己主張をするようにもなります。

最初の兄弟ができるのは、このように、自分を認めてほしい、自分を尊重してほしいという願いが強くなる時期であることが多いのです。

また、乳幼児期では、子どもが何か不安なことに出会っとき、特定の親しい大人(両親・担任の先生など)を心のよりどころとして自分の気持ちを立ち直らせようとする心の働き(アタッチメント)も育ちます。その大人が近くで見守りいざという時には支えてくれる状況の中で、子どもが自分の気持ちを立て直すことができたという経験を重ねていくことが大切な時期です。

このように、自分を尊重してほしい、不安な時に支えてほしいという思いが育つ時期に、家の中に自分よりも目立つ存在が出現するということは、子どもにとっては心理的に大きな危機を感じる状況だととらえることができるでしょう。

□きょうだいができたからといって、通常、上の子どもへの親の愛情が急に激減するわけではありません。でも、大きな存在感をもち、圧倒的に手のかかる赤ちゃんが家にいると、愛情は目見えない分、今まで親と過ごしてきた自分の存在や居場所が危うくなったように感じやすいのだろうと推測できます。

けれども、そのよう状況で子どもが本当に求めているのは、自分にも哺乳瓶を用意してもらうというような単純な見た目の「同じ」ではないのでしょう。親の時間や関りがきょうだいの一人に一時的に大きく振り分けられることがあったとしても、自分はこれまでと同じように親から認められ尊重される存在であること、自分のあんしんできる場所はこれからも間違いなくここにあるのだということこそ実感したいのだと思います。
“そこは心配しなくていいんだよ”ということを、子どもの年齢や状況に応じてどのように伝えていけばいいのか、その答えは一つではなく、とても難しい問題です。

□きょうだいになっていくこと・きょうだいの親になっていくこと

子どもたちが、お互いの存在を認め合い自分の立ち位置を受け入れるために葛藤していく様子をとらえると、「きょうだいができる」ことと、「きょうだいになる」ことは同じではないとのだと改めて感じます。磯崎(２０１６)は、きょうだい関係には「所有のもの」と「作り上げられるもの」という２つに側面があると述べています。「所有のもの」とは、きょうだいの存在は非選択的に決定され与えれるものであり、かかわりの如何に関わらず、動かしがたいある種の強いつながりがすでに存在しているということです。その一方で、きょうだい関係は、長期にわたる関わり合いと影響の授受を経て、しだいに変化し、成長の各段階において、様々な様相をみせるという意味で「作り上げられるもの」でもあるとされているのです。

この「作り上げられるもの」という側面が、「きょうだいになる」ということに重なるのだと思います。そのように、時間をかけて「きょうだいになっていく」のと並行して、親も時間をかけて「きょうだいの親になっていく」のです。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とはよく使われることわざで、いつかは乳幼児期のきょうだいそだてを笑って振り返る日も来ることでしょう。でも、その渦中においては、喉元があまりに長く、また、とんでもなく熱く感じられることもあると思います。喉元を短くさせ、熱さを和らげてくれる応援が必要です。きょうだい育てに奮闘されているみなさんは、周囲に応援を求めることをためらわないでください。子どもたちがゆったりときょうだいになり、親もゆったりときょうだいの親になっていけるように、そして、そのプロセスが家族にとって大事な時間になるように、みんなで支えあっていきたいと思います。

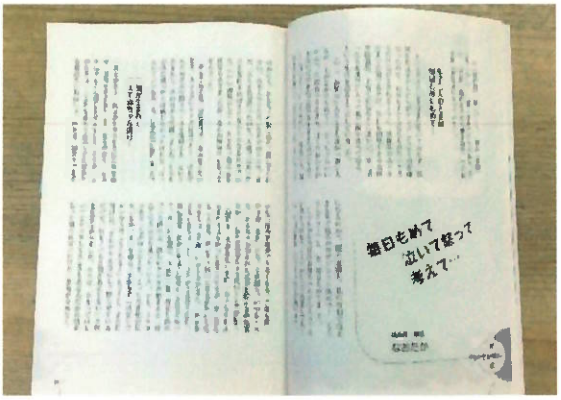
参考文献：ちいさいなかま　２０２０年12月号

きょうだいになっていくこと・きょうだいの親になっていくこと

京都文教短期大学　松田千都

よく、下の子が生まれたら、上の子をいっぱい受け止めてあげて…とアドバイスをしたりしますが、そうは言っても、そんな上手くもいかず、下の子にも上の子の時と同じように、沢山受け止めてあげたい思うのが親心ですよね。親御さんは、そういった様々な葛藤や板挟みの中で、一生懸命、目の前の子どもたちと向き合っているのだと思います。この記事にもありましたが、同じものを与えたり、赤ちゃんと同じ声かけをするのではなく、その年齢に合った、声かけをし、その子が本当に求めている形で受け止めをしていくことが、本当の意味でその子と向き合い、受け止めることにつながると私は信じています。そして、うまくいかない時は、弱音をはいたり、悩みを共有しましょう！それぞれにあった弱音や悩みを共有できる場所をぜひ見つけましょう！！子育ては孤独ではありません！

今回紹介した「ちいさいなかま」は、幅広いテーマで子育て・保育を子どもの目線に立って真剣に考えた、素晴らしい育児雑誌です。自分以外にもこんなにたくさんの人が同じ悩みを抱えている、それだけでも励まされる思いです。日常の育児・保育を様々な目線で考え、子どもたちにとってよりよいものを一緒に考えていける、保育者にとっても、保護者にとっても強い味方の育児雑誌です。

ご興味のある方は、ぜひ保育園にお問い合わせください。私たち保育者も年間購読をしており、日々の学習に役立てています♪

保護者と父母を結ぶ雑誌
【ちいさいなかま】
販売元
ちいさいなかま社
定価(400円＋税)